

「東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学経済学部3年 (鄭 晟在)

① ひとりの留学生として、私が日本に来て感じたことのひとつは、日本の大学生は留学に関しての興味が少ないということでした。大学では、留学支援プログラムを展開するなど頑張っている気はしますが、実際に留学を考えている日本人大学生は極めて少数だけです。興味を持っていても、アメリカや欧米など、先進諸国への留学が大部分で、留学生の数や留学先の多様性の観点から見れば、まだ留学が普遍化されていないように感じられます。

留学先の多様性に関しては、私もさほど変わらなく、「留学」とすればまずはアメリカやヨーロッパ諸国が思いつきました。しかし、この機会に行った台湾での楽しい経験は、その考え方を180度変えました。同じ東アジアに属されていて、比較的になじみのあると思っていた中国文化でしたが、実際に行って自分で感じた中国(台湾)文化は、まったく新しい世界の供宴でした。一週間だけの短い滞在でしたが、留学とはどの国へ行っても学びを得ることができるということ、また、実際に海外へ出てみないとそういったことが感じられないことなどが分かるようになりました。

② 台湾では、毎日しっかりしたプログラムに沿って皆で行動しました。主催者である台湾大学の学生らが、ワークショップ期間中のスケジュールを立てておき、私たちはそれに従い行動しました。最後の二日間にはワークショップの最終発表会があったため、每晚発表の準備をしました。夜のフリータイムに台湾の有名な夜市に行けばよかったとは思いますが、台湾の夏は日本よりひどく、昼のスケジュールが終わっただけでホテルから出たくなくなるということは少し残念でした。

④ ワークショップの最初の日には台北の歴史博物館に行きました。その後、夕食の際に京都大学、ソウル大学、台湾大学の皆が集まり、ウェルカムパーティをしました。二日目の朝は台北のコミュニティーセンターに寄り台湾の福祉の状況を見ました。その後、サトウキビ工場や剥皮寮に行き、台湾の歴史を感じることができました。そして三日目は、中正記念堂を訪ねてから、過去に合法的な売買春の所であった店に行き様々な話を聞きました。そして西門のゲイ文化を感じ、最後に台北中央駅を中心に集まっている外国人労働者たちの様子を見ました。フィールドトリップだけでも楽しかったですが、台湾の様々な社会問題が分かるようになりました。

④ 経済学部の学生として、社会学の経験は初めてでした。この度に自分の視野が一層広がった気がします。例えば、台湾大学の社会学部の建物では屋上にファームがあり、教授と学生らが自分たちの力で農作物を育てています。それを見て私は、「これを売ればどれだけの労働が必要でどれだけの収益が得られるか？」という疑問がまず浮かびました。しかし、一緒にいた社会学部の先輩は、「このファームはコミュニティー作りにとってもいいと思います」と言いました。このようなところで、同じ物事も人によって解釈が違うということが分かりました。私は個人的に社会的企業を営むことに興味があります。しかし、今回の留学の切っ掛けに、社会問題を把握する視線や能力がまだ自分には備わっていないということを感じました。これからの進路を考えても、このように視野を広く持つて行くことが大事だと思います。